

---

# 要するに。

よこたて十

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
要するに。

【Nコード】  
N0938L

【作者名】  
よこたて十

【あらすじ】  
いつものように何気なく学校に行ったら、そこは彼の知らない場所 並行世界 パラレルワールド だった 三年Z組  
銀八先生×涼宮ハルヒシリーズ

## ゼロ（前書き）

移動しました。元小説はこれから更新しません。  
突然すみません。

中の人は同じですのであしからず。

## ぜろ

いつものように眼が覚めた。  
いつものように顔を洗った。  
いつものように朝食を食べた。  
いつものように着替えた。  
いつものように家を出た。

それなのに、  
そのはずなのに、  
どうしてこんなところに来てしまうんだ？

俺は三年Z組なんてクラスを知らない。

こんながちゃがちゃしていて、  
やたらキャラの濃いやつばかりが集  
まるクラスを、  
俺は知らない。

こんなところに来てしまったのがハルヒのせいだといつのなら、  
今  
度こそあいつと縁を切る。

## いち（前書き）

正直なところわたしはハルヒを消失までしか読んでおりません。アニメはちょこっと、漫画についてはさっぱりわかりません。

エンドレスエイト？なにそれ

ハルヒのほうはうる覚えなところが多いです。

口調とかに違和感があったらすみません。

ちなみに朝比奈さんとかの上級生はでてきません。なぜなら、三年生だからです。

## いち

俺は、黒板の端に無造作に張られていた、座席表から自分の席を見つげ出した。

乱暴に鞆を机に置いた。

なんだかこの教室は視界に入る色がやたらと黒い。

よく見なくても、この学校の男子生徒は学ランが制服らしい。そして女子は紺色を基調にした由緒正しき古風なセーラー服。

どつりで黒いはずだ。

なぜ着替えたときに気付かなかったのか、俺はよくわからない。もしかしたらどれもこれも都合主義としか言いようのないハルヒの例の力とやらなのかもしれない。

人間というのは不思議な生き物で、気付かないうちは違和感などかけらもないくせに、一度気が付いてしまうと、居心地が悪くてしょうがなくなるものだ。俺はまだ一度も学ランなるものを着たことがない。今日が初めてだ。

それにしても、なぜ俺はこんなことになってしまったのだろう。

いつものように起こされて、普通に着替えて、普通にここに来たというのに、なぜ、こんなにキャラの濃すぎる生徒しか集まらないようなクラスに来てしまったのだろう。

しかし、Z組というのはどう考えてもおかしい。そんな番号になるほど生徒が多くいるようではないし、何かを意識しているのだろうか………

いや、これ以上深読みするのは止そう。

こういう裏事情には、素人が突っ込んではいけないものがたくさんあるのが、版權というものだ。

話題を戻そう。

俺の読みが当たっていれば、俺を面倒事に巻き込んだ張本人はハル

ヒであるはずだ。いや、絶対にハルヒであるはずだ。絶対に。残り少ない全財産をかけてもいい。

、と、引き戸が開いた。

扉を開けたのは、見なくてもわかる。涼宮ハルヒだ。

水色の襟と白が基調の北高の制服を見慣れているために、ハルヒの古風なセーラー服姿は全体的に暗くみえる。

とはいえ、髪型は相変わらずだ。明るい橙色のカチューシャに短めの黒い髪。

少しイメージの変わったハルヒの姿が可愛く見えるのは、中身を詐欺しているとしか思えないそのルックスのせいだ。

まあいい。

それにしても、教室の騒々たる有様を目にしたハルヒの表情。

「え？」

と、言っている声がここにまで届きそうなほどに完璧な形でその唇が半開きになり、その黒い瞳は大きく開かれている。少し表情がひきつっているのも面白い。

絵にかいたようなハルヒの驚愕の表情を俺は見たことがない。これは良い見物だ。

それからハルヒは二、三度、キョロキョロと教室内を見ます。

ハルヒは自分がどういう状況に置かれているのかを認識したらしい。先刻まで浮かべていた、驚愕の表情から、『良い暇つぶしを見つけた』という高慢な侯爵夫人の表情になった。

これは、ちと面倒なことになった。

ここでハルヒに興味を持たれると、俺は帰れなくなるかもしれない。もしそうなった場合は長門に頼るくらいしか選択肢がないわけだ。

……もつとも、この世界に長門がいたらの話だが。

文芸部があるかどうかもはっきりとわからないのに、あいまいな希望に縋るのはみつともない気がしなくてもないが、俺一人ではどうあがいても、あの爆走女を止めることはできない。

少しくらい希望に縋ってもいいはずだ。

そんなことを考えていると、ハルヒと目があつた。別に厭なわけはないが、なんとなく厭な気しかない。

戸惑いが少し残ったままの表情のハルヒがこちらへ足音高らかにこちらへやってきた。

「ねえ、キヨン、一体何がどうなってるのよ」

そんな言葉の割には心なしか、表情は好奇心で明るいい色をしていた。

「それがわかれば苦労せん」

そう言葉を返す。

ハルヒが妙な思いつきをしなければいいが、と藁にもすがる思いで祈っていたのだが、このハルヒの嬉しそくに輝いている表情を見れば、ハルヒが妙な思いつきをしないというのは無理そうだ。

「どうしてあたしがこんなところに来てしまったのかはわからないけど、ものすごく面白そうなクラスね。もとのクラスに比べれば」と、ほくほくした顔で言う。

一週間は暇しないで済みそうだが、とかなんとか呟きながら、ハルヒは再び足音高らかに席に戻ろうとするが、どうやら自分の席がわからないらしい。

あたりまえだ。ここには今来たばかりなのだから。

ハルヒは右隣にいた、黒髪の男子生徒に声をかけた。

その生徒は、俺なら声をかけるのをためらうほどに整った顔立ちをしている。うっかり失礼なことを口走れば、眉間にしわをよせかねない表情から察するに、明らかに気難しそうで、唯一無二のリーダー格にいそうな顔だった。

「ねえ、あなた、あたしの席どこ知ってる？」

何気なく尋ねられるハルヒもハルヒだ。こちらは違う意味でリーダー格にしかないだろう。

「ああ、お前の席なら、あれだろう」

指差した方向を見て、ハルヒはにと性分である勝気な笑みを向けた。

「ありがとう」

しかし、そんなハルヒには目も向けず、そっけなく言葉を返した。

「ああ」

その生徒とハルヒのやりとりのあと、俺は彼から目を離さなかった。なぜなら、そのすぐ後に彼が怒声を上げたからだ。

「総悟てめエエエ！」

振り返った彼はそう言った。騒音に掻き消された怒声はそんなに大きな声ではなかったのだが、その迫力と剣幕はものすごいものだ。その怒声を浴びせられているのは、こちらもとても整った顔立ちの男子生徒だ。大きな目と栗色の髪は中性的ですらあるのに、その表情に感情らしきものはほとんど見当たらない。黒髪のほうとは違う意味で、俺なら声をかけるのをためらうだろう。

それにしても、この黒髪のほうの怒っている理由がよくわからない。なぜ、怒っているんだ？

「マヨネーズにケチャップ混ぜるなんて外道だろうがアアアア！」  
いや、おかしいだろう。

俺は反射的にそう口にしかけるところだった。  
何だって？

マヨネーズ？

このクールな外見からは想像できない単語だ。もしかして、この黒髪の生徒はいわゆるマヨラーというやつなのか？

ふと、視線をずらすと、ハルヒが面白そうにその光景を見ていた。確かにこれは面白い光景ではあるが……

「中途半端な黄色がなんか気に食わねエから、偶然持ってたケチャップで赤を混ぜてみただけでさア」

江戸っ子のような変に語尾が間延びする訛りで、襟を掴まれているそいつは、そのものすごい剣幕にたじろぐ様子はかけらもなく、何食わぬ顔をしてそう言葉を返した。

「偶然じゃねえだろうがアアア！」

このままだったら、きつと喧嘩になるだろうな、と思いつながら眺めていたのだが、そんなとき、引き戸が開かれた。

「相変わらずうるせえんだよ、修学旅行の一夜目ですか、コノヤロ  
ー」  
扉を開いた彼の姿は、アンニユイを形にしたような、とても教師と  
は思えないそれ。典型的な教師の姿から、彼の印象を大きく離れさ  
せている第一の理由としては、その日干しされている魚のような目  
があるだろうか。

いや、そんなことはどうだっていい。  
その声を聞いた時、俺は絶句した。

いち（後書き）

ハハツ、ワロス。  
なんだこれ。

それにしてもキヨンの語りは書きやすい分回りくどくて長くなりやすいな、うん。

まあ、うちにでてくる版權の彼らは同じ姿になれるかぶり物をかぶった名前だけのアレですけどね。

ハルヒとか特に。

彼女のセリフはやたら難しい。言い回しとか、用いられる妙な例えとか。キヨンの語りも大体は書けるんだけど、例えとか言い回しの用法がよくわからん。知識も浅いしね。

谷川っていう人のちゃんとした真似がわたしにはできないらしい。誰か『涼宮ハルヒシリーズみたいな感じの比喻を上手に使いこなすことができるようになる教室』を開いてくれ。

いや、開いてください、お願いします。

に

着崩した白衣と安物のサンダルという出で立ちをしている、二十代後半にしか見えないのに混じりけのないここまで一色なら白髪もいいかと思えてしまうほどに白い頭の教師が、教室に足を踏み入れた途端なぜか、騒々しかった教室はすぐに静かになった。こんなにキヤラが濃い生徒ばかりしか集まらないようなクラスだというのに、アンニユイを形にしたような教師が、戒めなのか揶揄なのかわからない言葉をかけただけで静かになってしまうというのは、非常に驚きだ。

そんなことより、この男の声。

喉の中に誰かもう一人住みついているのではないかというほどに、まったく同じの声質だ。

というか、同じ人が声を当て

……いや、なんでもない。

ふと、その教師が俺のほうを振り返った。

「メインキヤラを一人の人が二役するというのは、音声的におかしい。故に、今からお前を俺は敵とみなす」

初対面の人間に宣戦布告した教師を、俺は初めて見た。いやそんなことより、言っている内容だ。ツッコむのさえ面倒になるような、倫理を無視した発言だ。

「……は？」

思わずそう聞き返したが、その教師は何もなかったかのように、教室の上へ名簿を乱暴に置いた。

それから、何もなかったかのように、その教師は口を開いた。

「そんじゃ、ホームルームはじめんぞ」

言いながら、寝癖なのかくせ毛なのか天パなのか、はね放題の白い頭を乱暴に掻きむしった。

一体何なんだ、というほどに騒々しい一日だった。

とにかく、このクラスの生徒は無茶苦茶なことしか言わない。それが自発的なボケなのか、思ったことを口にしていただけなのか、俺にわかったことではない。

特に現国なんかはぼろぼろだった。というのも、教科担任が例の三年Z組の担任であるらしい白髪教師だったからだ。

このクラス自体、乱立するボケがあるというのに、彼自身も素っ頓狂なことを口走り、クラスの眼鏡をかけているらしい誰かがテンション高くツツコむ。そんな彼をいじるために、教師はさらにボケを口走る。

その無限ループによって、ろくに授業もせずに五十分間が消えていった。まあ、面倒な授業が潰れてくれて、願ったり叶ったりといったところだが。

この親にこの子ありとはよく言うが、まさに、この担任にこのクラスあり、という感じだったわけである。

そんなことを頭の隅で考えながら、俺は文芸部を探していた。要は長門を探している。

もし、俺がここに立っている理由がハルヒのせいであるというのなら、きつと長門もいるはずだ。

……とはいっても、はっきりとした根拠というものは無いのだが。廊下を速足で歩きながら、それらしい部屋を端から探して回っているのだが、やはりこの学校に文芸部はないらしい。

どうするべきだろうか。

そんなとき、前から歩いてきていた、大きなハードカバーの本を両手に抱えた女子生徒が俺の前で立ち止まった。

「……………」

大きな瞳がじつと俺を見ていた。一片の感情さえ浮かんでいない、完全な無表情のその瞳。頭一つ分小さな身体でそこに立っているというのその彼女。

俺は雰囲気 of 全く違う制服のせいか、一瞬、誰なのかと思った。

「長門か！」

俺が思わずそう、叫ぶように言うと、わかるかわからないかの程度で、長門は小さくうなずいた。そして、右側をすつと指差す。

そこには引き戸がある。その引き戸には『SF・ミステリ愛好会』という札がごちんまりと掲げられていた。

「今作成されたばかり。……入って」

作成、ということとは、長門がこの空間にこの部屋を今作ったばかりということか。要はありあわせということだろう。

長門は小さな声でそう言うと、引き戸をからりと開けた。

入ってみると、以外に広い。しかし、小奇麗ではあるが、切れかけの蛍光灯と、乱雑に重ねられた古いプリントのせいで、部屋が暗く感じる。なぜか、床の上にはパイプ椅子が三つ、きれいに並んでいる。

まるでここに俺が来ることを知っていたようだ。まあ、椅子を出し入れする暇をなくすために長門が最初から用意しておいたのだろう。俺は長門に聞きたいことがありすぎて、椅子に腰を下ろしたとたんに沈黙を破った。

「どうなってるんだ？ いや、そもそも、ここはどこだ？ どうして俺はあのクラスにいる？ どれもこれもハルヒの仕業なのか？ お前は何か

長門は何も言わずに俺を見つめている。口を開かないが、どうやら長門は『そんな不毛な質問はいいから説明させる』とその目で語っているような気がした。

俺は口を閉じた。

長門は口を薄く開く。

「ここは『銀魂』という著作権作品のパラレルワールドである、』三

年Z組銀八先生』という版權作品の中。白髪の教師は恐らく『坂田銀八』という人物。思いつきで行動する。基本的に性格は奔放」  
長門は両手に抱えた本の中から、単行本サイズの本を一冊、俺に向かつて差し出した。

「詳細はここから見て」

そう言つて渡されたのは、本日の授業風景のスクリーンショットともいえる絵の表紙のコミックノベル。

「『三年Z組 銀八先生』か……これでもかつてくらいのパロディだな、怒られないのか」

「毎回PTAからの苦情は他の作品にひけをとらない」

長門はさらりとそう答えるが、それはものすごいことなのではないかと、ちらと思う。

銀魂という作品自体は聞いたことがある。とはいっても、もうジャンプなど買う歳でもないし、週刊なんて買いそびれてしまうから、中身を詳しく知っているわけではない。

ただただ、無茶苦茶な展開と内容と台詞回しの漫画ということだけは聞いている。

まだ明るいうちのアニメとしてよく四年間も続いたものだと、感心する。

その時、引き戸がけたたましい音をたてて開いた。

面倒だったが顔を上げると、やはりそこには傍若無人を絵にしたような表情を浮かべたハルヒが立っていた。

「こんなせまつ苦しいところで何やってんのよ！」

## に（後書き）

たくさんつつこみたいところはありますが、何も言わないでおきましよう。

とりあえずながもんちゃんが出せてよかったと思います。

遅すぎますがアニメ銀魂終わっちゃいましたね。ほんとに四年間続いたのはすごいと思います。

そういえば活動報告とかいうのがあったことを思い出したのでそこから書きたいことをたくさん書き散しておきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0938/>

---

要するに。

2010年11月16日10時23分発行